

信濃教育

巻頭言

伊藤長七

諏訪には「諏訪寒水会」といって、諏訪出身の伊藤長七（寒水とも号した）の著書を研究しているグループがある。伊藤長七は明治一〇年諏訪郡四賀村に生まれ、長野師範学校を卒業、後東京高等師範学校（後東京教育大学に包括され、その後筑波大学に改組される）に学び、その後革新的な教育を実践した教育者である。

師範学校在学中から教育革新運動に熱心であった長七は、四年生時は県下小学校を参観する折、仲間と共に自分たちで授業を行い、全校職員の前で批評を行ったという。痛快な話である。長七が長野県の学校で教鞭をとったのはわずか三年間だけである。初任校は諏訪高等小学校。そこで長七は子どもの自発活動と身体活動を重視する活動主義の教育を行った。遠足登山、野営、雪中行軍や雪合戦、夜間の諏訪湖水一周などを行い、学校は活気に満ちたという。しかし、教師の威厳や教育の神聖を重視する旧思想と対立。わずか一年で諏訪を追われ下諏訪小学校へ。さらに半年後は岡谷小へと転々とする。挙げ句の果てには、諏訪郡内では長七を招く学校がなくなってしまうのである。この「諏訪の暴れん坊」を救ったのは、小諸小学校の伴野文太郎であった。そして島崎藤村との運命的な出会いを果たすのである。『破戒』に登場する土屋銀之助は長七がモデルだと言われている。小諸では一年のみの生活であった。「小諸を去る辞」を残して上京した長七は、その後信州に帰ることはなかったが、木崎湖夏期大学や軽井沢夏期大学の開設に尽力するなど、信州の教育を遠くから支えた。

伊藤長七はたった三年間のみ信州の教師であったが、三年の間に蒔いた種、培った萌芽が、後の大正自由教育はじめ信州教育の開花をもたらしたと言われている。信州教育の魁けとなったのは「諏訪の暴れん坊」と言われながら、子どもや社会のために正しいと思うことは、やり遂げる信念をもった若者なのである。この頃の信州には長七のような若者が数多くいた。

温故知新と言う。芭蕉は「古人の求めしところを求めよ」と言った。寒水会のみなさんのように、古人の思想や実践を学ぶことは、不透明な時代といわれる今だからこそ、意味のあることであるし、そんな中から長七のような教師が生まれてくるように思う。